



研究員卒業レポート

地域力を活かした『地産外商』

客員研究員 武田 昭文
(愛媛うまいもの販売株式会社)

■はじめに

昨年(2009年)の4月1日に着任して初仕事は、「舞たうん100号」の裏表紙に職員を紹介するために掲載する写真の撮影でした。みかん農家に生まれ、農業とともに50年余り「地域づくり」とは何か、センターがどんな仕事をしているかなど、全くわからないまま着任し「地域づくり」に携わることになることは、まさに青天の霹靂でした。同時に、わずか1年という短い間で、私にはかけがえのない1年間になりました。

■愛媛の地域活動者との出会い

担当した業務のひとつが、設立20年を迎えた「えひめ地域づくり研究会」(代表運営委員・塩崎満雄氏、近藤誠氏、渡辺浩二氏)の事務局でした。運営委員の方々は皆さん「地域づくり」の実践者で、地域の実情や取り組みを惜しげもなくお教えいただきました。

また、若松進一氏(研究会議の前代表運営委員)には、「地域づくり」の基礎や歴史を学ばせていただいたことも大変嬉しいことでした。岡崎直司氏(タウンツーリズム講座主宰)とは、愛媛の近代化遺産(県庁、道後のダム、観測所、レンガ作りの鉄橋など)をセンター職員と一緒に現地視察をしながらご教授いただいたことも印象深い勉強会でした。

そして、「四国へんろ道文化」世界遺産化の会の活動では、代表世話人の小山田憲正住職(四国八十八ヶ寺・仙遊寺)や武田信之氏(日本のお手玉の会・元会長)にご一緒させていただき、久万高原町から松山市恵原町までのクリーンウォークに



遍路道 坂本屋

企画段階から参加し事前の草刈りや準備をして、はるか昔に弘法大師が歩いた遍路道の一部ではありましたが10kmを歩いたことも忘れがたい取り組みでした。

さらに、前田眞氏(NPO法人まちづくりに支援えひめ代表理事)と中道仁美先生(愛媛大学農学部)とは地域づくり活動アシスト事業で、西予市明浜町を活性化させるということテーマに取り組んで何度も地元に出向きました。地元の方が集まれる時間は毎回19時で、夜中まで議論し、その熱弁に圧倒されつつ帰宅はいつも真夜中になっていました。が、地元の方々のお話を聞かせいただきましたことは大変有意義でした。

■「舞たうん」の編集

年4回発行している「舞たうん」は、まちづくり部門の担当者が編集することになっていたもので、102号(2009年10月号発行)を担当することになりました。特別な情報があるわけでもなく実践している立場でもありませんでしたので、歴代の特集を見たりしながら何を特集すればいいのかとずいぶん悩みました。いろいろと悩んだ末に年度当初に「ごつくん馬路村」の東谷望史組合長にご講演いただいたことも参考にして、



タイトルを「地産地消による元気なまちづくり」(詳細は102号をご覧ください)



宿野々橋 (石手川上流)



煉瓦アーチ橋 (伊予鉄道 鉄道橋)



遍路道



旧制松山高等学校講堂
(愛媛大学付属中学校講堂)



地域課題研究サロン

としました。

この編集の取材では、ご執筆いただいた方々の地域への熱い思いやご苦労話をお聞かせいただくことができ、発行前から驚き興奮していたことを今でも覚えております。

■地域課題研究サロンでの出会い

センター主催による「地域課題研究サロン」(年2回実施)は、毎回実践者をお迎えしての講演とパネルトークで大好評の勉強会です。最初の研究サロン(9月)では、鹿兒島県鹿屋市「通称…やねだん」の豊重哲郎氏をお迎えして、「行政に頼らない地域再生」をテーマにご講演をいただきました。タイトルにも驚かされましたが行政に頼らず、できるだけ住民による共同自治で頑張ることが一番大事で、頑張ること、頑張ったことに対して、行政が後方から支援する仕組みづくりが良い結果となることを伝授されました。豊重氏は、翌日には北海道での講演が予定されており、精力的に全国に向いて惜しげもな

くそのノウハウを伝授している姿には感銘いたしました。

2回目の研究サロン(2月)では、四万十ドラマ(高知県)の畦地履正氏をお迎えして、「地元発着型産業づくり」をテーマにご講演をいただきました。全国的にもすっかり有名になった新聞バッグをはじめ、栓製品、香り米など地元の道の駅「四万十とおわ」の良さを十二分に活かし、高知県外にも販路を開拓された功績は大いに参考になりました。また、パネルトークでは村田武教授(愛媛大学社会連携推進機構)をコーディネーターとして地元の実践者の皆さまと大いに語っていただいたことは収穫の多い勉強会になったと思っております。

■おわりに

この1年間はセンター職員の方々に支えられ、また多くの方にお世話になりました。地域のことを学ばせていただきましたが、わずか1年で卒業することになるとは夢にも思っておりませんでした。

今は、愛媛県内の農林水産物や食品・菓子などの産物を県外(首都圏や関西圏)へ紹介し販売する「地産外商」の仕事に携わっております。

地域を活性化化する取り組みのひとつに「地産地消」というのがあります。一方、消費マーケットから言えば、消費は人の「口数」に比例することから、減少する地域経済から首都圏や関西圏での県産品を販売する商品を作り・育て、新しいマーケットを創造する「地産外商」も地域活性化に貢献できる手法のひとつではないかと考えております。

販売の主戦場には47都道府県の産物があります。愛媛県は農林水産物をはじめとした多くの素材の宝庫といわれ、それを活かした加工品も数多くあり全国で販売できる商品がまだまだたくさんあります。これまでの経験を活かし、他県に負けないような地域力を活かした商品開発を行い「地産外商」を行うことで、少しでも「地域づくり」のお役に立つことができれば幸いです。